ある都市の物語の苦痛について

—イェルク・シュタイナー『ヴァイセンバッハとその他の人々』—

黒　田　晴　之

そこに描かれている都市が何処にあるのかが問題である。イェルク・シュタイナー (Jörg Steiner 1930 年生) はオッターヴィルという都市に，ある程度は読者も納得する歴史を周到に配置している。

ローマ帝国の外人部隊にちなむハドリアヌス通り
ヴァンダル人の侵入
異端審問と革命と王政復古
ナポレオン軍の侵攻
都市として誕生八百周年

かれはオッターヴィルに関する地政学的な説明を与えることも怠らない。あたかもオッターヴィルという〈場所と記憶〉を構成するカードを揃えて見せているかのようである。

港湾機能を擁する海岸と運河
イタリア語圏の国と接している国境
トランスアルペン・トンネルの計画

それゆえ以上の記述から判断してオッターヴィルが，ヨーロッパに位置することは確かなようである。それでも登場人物の一人がドイツからの亡命者であることから，そこがドイツではないことは一応は明白であるが，オッターヴィルを通してシュタイナーが現在のドイツを，それも旧東独のことを揶揄していないとは断言できない。その証拠にシュタイナーは旧東独の国民が統一前後に陥った精神状態を指す「多幸症」(Euphorie) という言葉を数カ所で用いている。そこには公安——それをシュタージへの当てこすりと読めないこともない——の長官クーラートを含む「将来の指導者」(Barone) たちさえ登場している。そしてシュタイナーが季節の推移——それは『網を破る』(Das Netz zerreißen 1982) 以来十八番にしている手法である——とともに描いているのは，かれら「指導者」たちに起きた数年の出来事なのである。

あきらかに『ヴァイセンバッハとその他の人々』(Weissenbach und die anderen 1994) では「指導者」たちが登場人物の役割を演じている。それにも関わらずシュタイナーが主人公に選んだのはオッターヴィルという都市の存在ではなかったか。すなわち犬用のトイレの方が郵便箱よりも数が多かったり，そのトイレを使用した者や悪戯した者の名前が当局に記録されるとか，クーラートが「外国人」の「順応(アイングリーデルン)」や「同化(アシミリーレン)」に関する発言をするといった都市の現実と比べると，かなり詳細に特徴付け(カラクテリジーレン)がされている場合でも登場人物の存在感は以下に示すように希薄である。

かれらは今年85歳になるフォン・ベーレンのもとで，かつて一緒に机を並べた同級生なのだが，そのフォン・ベーレンからしてドイツから亡命した曰くつきの教師で，あたかも口癖のようにビューヒナーの講釈を垂れている。かれは亡命者と言ってもオッターヴィルの出身で経済的な理由からポンメルン地方に逃れた移住者(Aussiedler)を祖先にもっている。おそらくチェーホフの『退屈な話』の老教授あたりが下敷きになっている[1]フォン・ベーレンという人物は，かれの昔の教え子に弄ばれながらも体面を取り繕うのに忙しかったり，あるいは死の床にあっても子供時代に食べたアイスクリームを云々する始末である。

そもそも物語はフォン・ベーレンの教え子で都市計画に従事しているユーリー・ヘルフェンシュタインが，ある屑籠から拾った手帳を仲間に披露する場面から始まっている。それはヘルフェンシュタインの前任者にあたる無名の人物が，19世紀の終わりから地質や建物の状態に関して付けていた記録であった。そのようなオッターヴィルの下部構造(インフラストラクチャー)の説明にシュタイナーが委曲を尽くすのは，それが物語を展開させるのに役立つからだけでなく，かれら「指導者」と呼ばれる人物たちが自分たちの牛耳っている都市に，おいしい儲け話の機会がないか窺っているからである。たとえば『明日への建築』誌に「破産と廃墟(ルイーン・ウント・ルイーネ)」というテーマの寄稿をするほどの建築家で，ヘルフェンシュタインの親友でもあるオブレヒトは，パリの凱旋門やローマの円形劇場に劣らぬ巨大建設プロジェクトを狙っている。そこには当然のことながら莫大な資金の流れが念頭にある。あとは公安長官のクーラートが自分の握っているインサイダー情報を使って，かれの仲間たちと談合の共謀を巡らすことだけが問題である。そこへラテンアメリカで先物取引やエメラルド鉱山の採掘で成功を収めながら，エジプトで刑事事件を起こしたアムヴェークが「バナナの共和国」から「ジャガイモの共和国」へ帰国する。かれは「指導者」たちとトランスアルペン・トンネルの建設を画策する一方で，「モーター党」なる政党を設立して議席の獲得を目指すことになる。

おそらくオッターヴィルはヨーロッパの市場経済のなかに完全に組み込まれ，かれら「指導者」たちも〈神の見えざる手〉に翻弄されているだけなのかも知れない[2]。それでも最終の引けのあとで夜毎シャンペンの栓が抜かれるような時期は良かった。あらゆる投資家にとってオッターヴィルは主要銘柄ではない物件でさえ連日の高値を更新する投資の一大拠点と化している。それと時を同じくして医師たちはアメリカから広まった「笑い病」のことを話題にしている。そうした症候を家庭雑誌『メルク』は最終的には衰弱へいたる「笑

1) チェーホフ『退屈な話』湯浅芳子訳，『退屈な話・六号病室』所収（岩波文庫）1983, 11頁以下。

2) あえて日本の現代文学との比較を試みてみるならば経済原理をたくみに小説に取り込んだ小説として村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』(1988)と『国境の南，太陽の西』(1992)がある。そこでも登場人物たちが〈神の見えざる手〉に支配される様子が同時代を見るシュタイナーと同じ構想のもとに活写されている。あるいは戦後という歴史を描きながらも徹底して「歴史の不在」を綴っていると蓮實重彦が看破した『ねじまき鳥クロニクル』(1994-95)を『ヴァイセンバッハとその他の人々』と比べても面白いかも知れない。蓮實重彦『歴史の不在』朝日新聞，1995年8月29日11面

いの発作」だと説明してはいるが，その「多幸症の気分」に皆が一様に憑かれていることは間違いない。かれらオッターヴィルの「指導者」たちとてその例外ではなく，いまは牢獄で囚われの身となっている精神科医ミシュラーの口座さえ膨れ上がっている。そして「指導者」たちは好景気の勢いに乗じて魔がさしたような愚行をとり始める。すなわちコメノリスは銀行に勤める妻と謀って他人の預金を奪って逃亡し，あるいはオブレヒトも美術品の思惑買いという投機に走りかけ，あの公安の長官の地位にあるクーラートも自分の詩集の編纂を夢見ている。かれらの将来がどんな結末になるかは容易に予想がつくだろう。あたかもドミノが倒れるように「指導者」たちの夢が次々と潰えていき，その拝金主義と俗物性が当然の報いを受けるだけである。

それでは主人公のヴァイセンバッハはどうか。およそ主人公としては極めて陰の薄いこの59歳の作家にはマリールーという18も年の離れた恋人がいるが，かれもオッターヴィルで起こる出来事のなかで中心の役割を与えられるでもなく，あるいは狂言回しを演ずるでもなく単なる幕間の人物に成り下がっている。ある場合には盗作を発表したことが明るみになってかえって喜んだり，100人以上は入る朗読会の会場で参加者が8人しかいないのを見て卒倒する。かれとて「指導者」たちの無邪気でかつ愚かな性格から免れているわけではなく，かれらの誹謗と中傷と策略によって精神的に不安定な状態にさえ陥っていく。そもそもシュタイナーは「物語」を産み出す者が自分の産み出した人物の「犠牲者」となる逆説を，かれ自身の小説の途中でコメノリスの見解として読者に伝えているが，かれら「指導者」たちのうち唯一「物語」を書く資格があるはずのヴァイセンバッハは，かれが自分の「物語」を書かないうちから「犠牲者」となっている。かれは例えば一度もフォン・ベーレンについて書きたいという願望を漏らしたことがないのに，クーラートから中央本部で密かに記録されている年老いた亡命者の書類を提示される。かれは一人の亡命者が歓楽街でもひっそりと暮らせるような，ある「都市の構想」を肯定的に描かねばならないのだが，それは作家にとっては半ば強制のように意識される。そのヴァイセンバッハに「妥協しないこと」の証しとして「物語」を書くよう忠告するのが，かつての師で今は死の床にある当のフォン・ベーレンであった。かれはヴァイセンバッハに「勇気を持って闘って下さい」，それが中央の広場にある「台座（ゼツケルヒエン）を守る」ためでしかなくともと示唆する。そうした忠告にヴァイセンバッハが従ったかどうかは最後まで明かされない。

かくして胡散臭い人物像を随所に散りばめたあとでシュタイナーは，オッターヴィルを徐々に不穏な雰囲気に包み込んでいく。ある郊外の町に設けられた不燃物焼却場で爆発事故が起こったのが最初の兆候であった。そのための処理が4カ月経っても終わっていないのは数週間前に通過した軍の投棄物が関係しているのかも知れない。それから活動家グループ「住宅難（ヴォーヌングスノート）」を名乗る3人の女性が中央本部へ「台座」が光る「現象」を目撃したとの報告を行ない，その様子を撮影したアマチュアのヴィデオがテレビに流され事態は騒然とする。そこに「集団ヒステリー」を感じ取る連中もいれば，あるいは「活動家」の破壊工作を話題にする人々もいるが，それは実はヘルフェンシュタインが企んだ計画だったのである。その事件は公共の秩序をなによりも重視する「指導者」たちを必然的に翻弄す

る一方で，「光の現象」以来「台座」の泉が病気を治す効果をもつようになったという風説によって，ヘルフェンシュタインの思っても見なかった方向を取り始める。やがてオッターヴィルの当局は大腸菌が見つかったことを根拠に泉の閉鎖を布告するが，その水の危険性をめぐって環境保護団体と市の建設課とのあいだで駆け引きが行なわれる。

それにしてもシュタイナーが頻繁に筆を運んでいる「台座」とはなにを意味しているのか。かつての記念碑が大理石から青銅に代わったり治世に応じて次から次へと受け継がれていっても，その「台座」は相変わらずオッターヴィルに待ち合わせの場を提供している。あるいは「指導者」たちも「台座のところで待ち合わせよう」を自分たちの合い言葉にしていたし，あのフォン・ベーレンが最期にヴァイセンバッハに希望を託すのも「台座」の維持であり，ベアトリーチェ・シェルテンライプら「住宅難」のメンバーが抗議したのも，そこに駐車場を建設するため「台座」を取り壊そうとする計画に対してであった。かの女たちの一人サンドラ・ペータースが言う「あなたは私の台座なのよ」はレバノン人の恋人への愛の言葉であり，シュタイナーの小説そのものは「指導者」たちの計画がすべて頓挫したのちに，かつてと同じ「台座」の周りで繰り広げられる平和な情景で終わっている。

あくまでもオッターヴィルの歴史に寄り添いながら，それとは無縁の「台座」を物語の中心に据えることによって，シュタイナーは〈歴史の不在〉を暗示しているのだろうか。

戦後ドイツがあらゆる意味で一貫してヨーロッパのなかでの位置付けを強調してきたとすれば，かれが『ヴァイセンバッハとその他の人々』を通して炙り出したことのひとつに，そのヨーロッパの包括化（グロバリジールング）は市場経済の枠組みのなかで行なわれたという批判がある。あえてシュタイナーが『ヴァイセンバッハとその他の人々』でそんな当たり前の事柄を小説で描いて見せたのだとすれば，かれは小説のなかで言及しているフローベールが晩年に執筆した『ブヴァールとペキュシェ』のように，だれかの書いた文書をひたすら書き写すだけの筆耕を演じたことになる。かれは冒頭で「ヴァイセンバッハとその他の人々は単純な物語だ」と述べているが，かりにオッターヴィルが現在のドイツとどこか違ってはいても，それとは対をなすパラレル・ワールドだったとすれば，そのかぎりでシュタイナーの小説も「単純」だと言うことはできる。

あるいはシュタイナーが『ヴァイセンバッハとその他の人々』を書くに当たってカルヴィーノの『マルコ・ポーロの見えない都市』に範を求めた可能性——そこでも様々な都市のパノラマが語られる——も，かれがイタリアで活動する当の作家の名を作中で挙げている事実から捨てきれないが，その架空のマルコ・ポーロ譚ではフビライ汗（ハン）の勝負もついには「無」に帰すことが諭されている[3]。その意味でシュタイナーが小説の終わり近くで「物語を産み出す生こそが大胆な語り手である」と述べていることは意味深長である。この「物語を産み出す生」は「なんら注釈を加えず」に歩みを続け「台座」の周りにあるインビ

3) イタロ・カルヴィーノ『マルコ・ポーロの見えない都市』米川良夫訳（河出書房新社）1987

スやアイスの屋台で休んでいるかと思えば，メインストリートで待ち伏せをして水辺で突如効果を現わす。そこでは「ブーメランの軌跡」が空を切り取ったのちに，それを投げた「目には見えない持ち主」の手元に戻っていく。そうだとすればシュタイナーは〈歴史の不在〉と言うよりは〈歴史の無意味〉ないしは〈歴史の皮肉〉を書いたと言った方が良いのかも知れない。かれが自分の「物語」は「単純で短い」けれども決して「痛みがないわけでない」とも言った所以である。

スイスのビール出身のイェルク・シュタイナーは詩集『鴉の国のエピソード』(Episoden aus Rabenland 1956) でデビューし，イェルク・ミューラーの挿し絵を添えた『兎の島』(Die Kaninchenlinsel 1977) で獲得したイタリアとアメリカの文学賞以外に，スイスのベルン州文学賞を獲得するなどの経歴を有している。

Jörg Steiner: Weissenbach und die anderen.
Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1994, 181 Seiten.